

クロムヨウランについて

高橋 秀 男

A Note on *Lecanorchis nigricans*

Hideo TAKAHASHI

昭和60年度、横浜市の委託で緑区寺家町のフロラを調べることになり、4月25日に横浜市緑政局の宮沢哲也、本荘克行氏らとともに現地の下調べに行った。この時、本荘氏は昭和59年8月にこの付近の山でムヨウランを発見し、カラーフィルムで撮影されたとの話があった。ムヨウランはまだ神奈川県内では未記録と思われたので関心を抱き、早速帰途市役所に立ち寄り、写真を拝見したところ、それは間違いなくムヨウランの一種であり、本荘氏は花が紫色を帯びているからクロムヨウランではないかと推定しておられた。そこで開花期に標本を採集して検討する事になり、8月17日には本荘氏と地元の正田清男氏の案内で現地へ赴き、標本の採集と写真の撮影をすることができた。早速、花を解剖し顕微鏡下で観察する一方、写真を引き伸ばし、花の色を検討した結果、神奈川県では未だ知られていないクロムヨウラン *Lecanorchis nigricans* HONDA であることが明らかになった。

クロムヨウランは1931年に本田正次が、和歌山県産を基準標本として、植物学雑誌に記載したものである。それ以前1929年に正宗巖敬は屋久島植物誌のなかで、屋久島産を基準標本に、ムラサキムヨウラン *Lecanorchis purpurea* MASAMUNE と新名を与え、「花は紫色」と記載文をつけて発表した。ところがその後、前川文夫、津山尚らの研究により、この両種は同一種であるとの見解が発表され、当然先行名であるムラサキムヨウランが採用されるところであるが、種の記相文が余りにも短く不完全で、採用できないのでムラサキムヨウランはクロムヨウランの異名として扱うことを提唱した。一方実際に屋久島の現地でムラサキムヨウランを観察した里見信生(1982)はクロムヨウランとは茎の分枝、花の色、唇弁の形などに相違点があり、両者は別種であると主張した。この両種の分類学

的検討は今後の課題としたい。

前川文夫(1971)によると、ムラサキムヨウランを含むクロムヨウランの分布域は御蔵島、八丈島、紀伊半島、屋久島など暖地にあつて福岡県や浜松市は北限に当たる。一方、里見信生はクロムヨウランの分布域として本州(伊豆七島・東海地方・紀伊半島)・四国・九州をあげ、ムラサキムヨウランは九州南部・屋久島・琉球をあげている。このような図鑑の記述ではクロムヨウランの分布域に伊豆諸島を除く関東地方は入らないことになるが、詳細に地方の文献を調べていくうちに関東地方にも1例の採集記録があることが解かった。それは八王子市戸吹町の雑木林の斜面で畦上能力が1980年9月8日に、クロムヨウランが数本群がって生えている所を発見している記録がある。この標本は開花している個体でその着色写真図とともに東京都の高尾自然科学博物館に収蔵されているという。

寺家町の生育地はコナラ、クヌギ、クリなどの夏緑広葉樹の二次林内で、アズマネザサが密生し、普通はとも足踏み入れることができない藪であった。その林床の落葉の堆積した間に、7ヶ所ほどに点在して見られたが、地味な色彩のクロムヨウランは周囲の落葉や枯枝など周囲の環境に融和して、よく注意して観察しないと到底発見できないような所であった。8月17日に観察したときは既に花の終わった個体と、ちょうど花盛りの個体が入り混じって見られ、9月26日にもまだ若干の個体は開花しており、花期はそうとう長いようであった。

ムヨウランの形態的特徴については、既に本田正次(1931)、前川文夫(1971)らが詳述しているので、本報では寺家町で観察した個体について簡単に述べることにしたい。

地下茎は硬く、短く横走し、長さ3mmほどの広卵形

の鱗片をつける。花茎は高さ20cm内外あって硬く針金状をなし、黒紫色で光沢があり、地下茎と同様の広卵形の鱗片をつける。開花、結実をした個体は翌年地下茎の上部付近で分枝して新しい花茎を直立し、先に花序を着ける。従って掘り起こしてみると、前年の果実を着けた花茎の一部が残存している。花序は総状をなし、単一または2～6花を横向きに開き、花の盛りがすむと下向きとなる。子房は長さ1.4cm、褐色で茎とは色が異っている。花は長さ1.4cm、花弁、がく片は淡黄褐色で先端付近は紫色、ときに内面もやや紫色を帯びる個体がある。唇弁は殆ど全縁で舟形をなし、縁辺は不規則な波状歯があり、ずい柱より長く、外面の先端付近が紫色であるほかは白色である。内側の先端の一部に疎らに長毛がある。ずい柱と唇弁は中央より下方付近で癒着し、柱頭には突起状の短毛がある。果実は斜上し、光沢のある黒色である。

ムヨウラン *Lecanorchis japonica* BLUME は岩手県・宮城県以南の本州、四国、九州に分布し、クロムヨウランに似るが、花は少し大きく長さ1.5～2cm、淡黄色、唇弁は3裂して内面全体に密に長毛がある。

奥山春季(1978)は染野邦夫が川崎市で1977年11月に採集した果実期のムヨウランを神奈川県産の初記録とした。しかし、ムヨウランの特徴は唇弁の形にあるので、開花期の個体で同定しないとクロムヨウランかムヨウランかの判断は難しいと思われる。

一方、丹沢山塊のリストにムヨウランを載せ、産地にミノゲ(柳川)を上げている林彌栄ら(1961)の記録も、採集者の柳川定春(1983)がマヤランの誤りであることを指摘している。

以上の報告で神奈川県内にクロムヨウランが分布していることが明らかになったが、川崎市産も果実の図を見る限りクロムヨウランの可能性もあり、今後ムヨウラン類の分布については県内の精査が必要と思われる。

終りに本稿の執筆に当たり、横浜市緑政局の本荘亮行氏及び寺家町正田濤男氏にはご多忙のなか心よく現

地案内を引き受けて下さった。本館専門学芸員大場達之氏には種々ご教示いただいた。国立科学博物館 金井弘夫氏にはハーバリウムの標本閲覧に便宜があたえられた。ここに記し心より厚くお礼申し上げます。

文 献

- 畦上能力 1980 多摩草木の栞。多摩の自然, (64): 16-17.
- 土井美夫 1940 クロムヨウランとムラサキムヨウランについて。植物研究雑誌, 16: 688.
- 林 彌栄・小林義雄・小山芳太郎・大河原利江 1961 丹沢山塊の植物調査報告。林業試験場研究報告。133号。
- 本田正次 1931 日本植物新報知(十四)植物学雑誌, 45: 470-471.
- 前川文夫 1971 原色日本のラン。誠文堂新光社, 東京。
- 正宗厳敬 1969 カラー日本の植物 8. 単子葉類, 東京。
- 中島邦雄 1971 琉球ラン科植物目録。沖縄。
- 大井次三郎 1975 日本植物誌 顕花篇。至文堂, 東京。
- 奥山春季 1978 岩手県と神奈川県からムヨウランの便り。植物採集ニュース。96: 12.
- 里見信生 1982 ラン科 日本の野生植物。1. 平凡社, 東京。
- 津山 尚 1955 ムヨウラン属の一新種。植物研究雑誌, 30: 181-187.
- 上野雄規 1978 東北地方におけるムヨウラン属採集史。岩手植物の会, 15: 3-6.
- 上野雄規・保谷忠良 1979 宮城県白石市におけるムヨウランの分布。宮城の植物, 7: 14-18.
- 柳川定春 1983 丹沢山塊のムヨウランはマヤランである。FLORA KANAGAWA. (14): 84.
- (神奈川県立博物館)

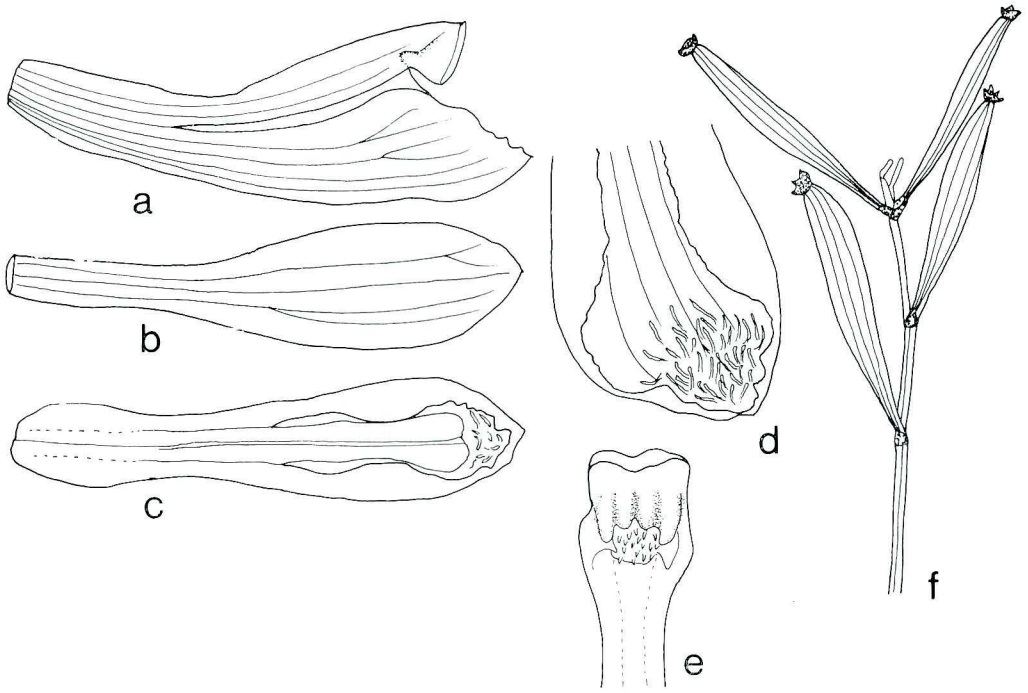


図1 クロムヨウラン *Lecanorchis nigricans*
a, 唇弁とずい柱(側面). b, 側花弁. c, 唇弁とずい柱(下面). d, 唇弁の先端.
e, ずい柱. f, 果実.



写真1 クロムヨウランの花 (横浜市緑区寺家町 1985. 8.17)



写真2 クロムヨウランの全景（横浜市緑区寺家町 1985. 8.17）.